



【内容要旨】

2010年 夏の経済教育セミナー 報告

■8月2日(月)名古屋 中学の先生対象

36℃を超える炎暑のなかの開催。会場は名古屋駅南口すぐのところ、この会場も昨年に引き続き、2年目である。

第1講義 「中学教科書で教える経済」 野間敏克先生担当

野間先生は、中学教科書を読んで、目次を見ても広すぎる、薄すぎる、つながりが理解できない、生徒にとっては読んであまり面白くない、世の中のことがこれではわからない、と最初に指摘される。その上で、授業を進めるに際して、全体としてところがけたいことを5つ指摘された。

すなわち、①課題（悪いこと）を語る前に、良いことを教えたい。例：市場の役割が典型。②二分法や決め付けた対立構図を止める 例：資本主義社会主義。③見逃されがちな対立の現実を直視したい 例：若者と高齢者。④教科書の話は身近であることを徹底させて欲しい。⑤いろいろな話に関係しているということを伝えて欲しい 例：企業—金融—社会保障、 歴史—経済—政治—法律—社会制度—科学技術。

それを前段として、

- 2 市場と政府
- 3 消費者と政府
- 4 企業と政府
- 5 金融と政府
- 6 労働と政府

7 財政問題 のそれぞれについて、今の教科書の記述を経済学的にはどう読むか、何が足りないかを指摘された。

質疑では、利子の教え方や、合理性と非合理性の事例は？などが出され、回答がされた。

第2講義 実践 ブルサ

東証が昨年開発した、ニュースを読んで株価の変動を予測し、所持金を増やしてゆこうというボードゲームである。名古屋では昨年に続いて二年目である。手順は以下の通り。

4人1グループでの作業をする。

200万円をもって、自動車会社、スーパー、衣料会社の株を買うか否かの意思決定をする。

新聞記事と人生カードを提示。

例えば、GDPが上昇し、ボーナスが上がったというニュースにどう対応するか（自動車プラス2、スーパープラス1、衣料－1）

これを10回繰り返し成果を競う

市場がどんな反応をするかを類推させるとともに、関連の経済概念を教えることができるようになることをねらいとしている。



先生方は、楽しそうにゲームに参加し、その後質疑が行われた。以下、簡単に記録しておく。

Q：このゲームは導入でやるのがよいのか、それともまとめでやるのがよいか？

A：どちらでも可。多くはまとめ（3月）に実施している。

補足コメント（愛知教育大学：水野英雄先生） ゲーム、シミュレーションはこのブルサに限らず大変有効。有名な貿易ゲームなども使える。ぜひ活用して欲しい。

Q：ニュースを取り上げるときに、NIEの観点も加味してもらえるとありがたい。

A：新聞は情報源として役立つので、新しい情報を素材にして活用して欲しい。

第3講義 大杉先生担当

元文部科学省の視学官で、現在岐阜大学で教鞭をとっている大杉先生の講義である。

大杉先生は、以下の四項目に関して、豊富なデータや教材例を提示しながら講義をすすめた。

第1番目は、現在の課題で、なぜ経済教育が必要になっているかを、グローバル化、情報化から読み解いた。

第2項目は、PISA型読解力が日本では弱いことを、グラフの読み取り、地域の判別など興味深い教材例から提示された。提示された二種類の問題は、先生方も頭をひねっていた。

第3項目は、そのための対応としての指導要領の改訂の意義と内容を説明した。特に、今回は、小学校5年に経済学習が入ったこと、中学公民の学習の冒頭に「対立と合意、効率と公平」の概念が入ったことを強調された。なかでも、効率と公平の学習の困難が訴えられている事に対して、「回転すし屋のあいっているいすと待ち人の関係」を事例としたらよいのではという中学生が提示した事例をもとに提言した。

最後は第4項目で、評価の問題が取り上げられた。評価は、従来通り4観点だが、技能が独立したことを強調された。最後に、表現と知識理解は切り離せないのではとの大杉先生独自の見解も提示された。

第4講義 グループディスカッション

約25名参加。

参加者が3グループに分かれ、アドバイザーの、野間先生、山根栄次先生から簡単な問題提起の後、ディスカッションを行った。自己紹介、自分の実践、こんなことが困っているなど相互に発言、アドバイザーの先生たちが、解答したり、参加者で話し合った。

最後に、話し合いの内容を報告しあった。以下、当日の報告から簡単に記録しておく。

Aグループでは、ここの面白い教材はあるが、それがつながりとして使えない、教科書との整合性などが見えなくて、単発になってしまうという悩みが多くだされた。

実践では、シミュレーションや実物教材を使って、子供が楽しい授業はできるが、それをこえて社会の仕組みにつなげるにはどうしたらよいかはまだ見えないなどの悩みが寄せられた。それに対して、ハンバーガーショップの教科書の記述を導入で、すべての項目で関連づける導入のネタを先生方がかんがえ



て実践するだけでも、ぶつ切りのものにはならないのではというヒントが出された。また、ハンバーガーよりは、できればケータイのような工業生産物を導入としてやったほうが、しくみを理解するなら、世の中全体が見えるという指摘も出された。

Bグループでは、限られた時間のなかでどんな工夫ができるか、紹介したり質問をしたりした。

Cグループでは、ゲーム教材の有効性、仕組みへのつなげ方などが話し合われた。

全体として、二年目でもあり、充実した講義と体験であった。参加者の満足度は高かったが、7割くらいの先生たちが、実践事例の発表が欲しかったとの要望をだしていた。1日でセミナーを実施するときの課題であろう。

文責：新井 明

■8月3日(火)名古屋 高校教員対象

前日に続き、炎暑の名古屋である。36度近い。出席者20名

第1講義 「高校教科書で教える経済の仕組み」 担当：篠原代表

タイトルは経済の仕組みであるが、対象を国際経済に絞り、清水、東京書籍の教科書を使って、問題点と改善点を解説された。

まず、現在の教科書の問題点を指摘される。現行教科書は、国際経済について学ぶには、順序がおかしく、これで何を教えたいのかが良く分からない。メッセージが伝わる構成になっていない。また、理屈の部分がきちんとわかれば、歴史や制度の部分が分かってゆくはずであり、制度や歴史が切り離されて、それもかなり多くのページが割かれていていすぎる、とも指摘される。

その上で、各論に入る。第一にあつかったのはリカード理論の問題である。貿易問題が、いきなり比較生産費説からでてくるが、この理論は、①分業が大事であること、②保護貿易は止めたほうがよいという、二点が分かればよいのであり、リカードの数値例をいれて解説しなければいけないものではない。また、リストの保護貿易論は時代遅れ、とも指摘される。現代では、リカードの仮定と違い生産要素（労働など）は簡単に国際的に動いている。比較優位の対象は、産業ではなく、生産工程である。そこを理解させなければいけない。

第二点は、国際収支表の読み方である。教科書では、国際収支表がいきなりでてくるが、無用である。これは暗記力、根性を要求するにものである。しいて教えるなら以下のようにすることを提案したい。

まず、読み方としては、①フローの取引を事後的に記録したものであること、②したがって、売るヒトと買うヒトの金額は一致する恒等式であること、確認したい。

所得の源泉	所得の利用	その差額
A財・サービスの生産・供給	a財・サービスの購入	貿易収支
B海外要素所得の受け取り	b海外要素所得の支払い	所得収支
C移転所得の受け取り	c移転所得の支払い	移転収支
D金融資産の売却	d金融資産の購入	資本収支
	外貨保有の増加	小計で經常収支

外貨保有の増加は、あとで誰かが貨幣を発行しない限り増えることはない
変動相場制では、この部分に介入をしないのが原則



固定相場制では、国際収支の黒字があれば貨幣供給は増えるのでインフレ
国際収支が赤字であれば貨幣供給は減りデフレ

以上の理解は、マンデル教授の考え方に基づいた解説であり、これなら理解できるはずと指摘された。

第三は、為替レートの決まり方である。教科書では需要曲線や供給曲線を用いて、書いてあるが、これは不要である。結局は分からないのであり、なぜ分からないかの理由がわかればよい。一番大きな理由は、利子率の差であり、それは将来予想と絡むからである。不確実性のものとの意思決定をしなければいけないからである。そんなことを理論で教えるより、中国での入試問題の例のように、日常と仕組みを取り入れて、思考力を高めるほうがよほど大事である。と締めくくった。

第2講義 「教科書で教える財政」 担当：中川雅之先生

中川先生も教科書の問題点から講義を始められた。現行の教科書は、制度が多く、その上で現状、少し理論が扱われている。これだけではやはり生徒はなかなか理解できないであろう。そこで、二つ提言をしたい。

一つは、評価を中心に授業をして欲しいということである。

制度の部分は、生活するうえで、また仕組みが分かる上であまり必要ないものまで含まれている。現状については、評価が大事で、そこを自分で考えられる教育が望ましい。理論は、その位置づけをはっきり教える人間が理解できていけばよい。とアドバイスされる。

提案の二つ目は、財政の三つの機能が書かれているが、それを具体的な数値や内容を提示しながら、本当にそうになっているかを確認しながら、授業をして欲しい。例えば、その年度の予算が何に使われているか、目玉の政策がどの役割に相当するかなどがそれである。その際には、財務省や日銀などから最新のデータが簡単にとれるので、それを是非活用して欲しいとも提言される。

これらを提言された上で、教科書の記述をもとに理論に関して二つ紹介された。

財政理論との接点は、乗数理論の理解が第一。これはやや古いが 1990 年代までは真剣に議論されていたものであり、検討に値する。

二番目は、教科書には、リカードの中立命題の内容が書かれているが、これは難しい。財政政策における減税の効果の評価の問題だが、高校生にはあまり意味がないのではないか。

財政破綻に関しては、ギリシャと日本の違いを理解しておきたい。①日本国債のほとんどが日本人によって購入されていること、②貯蓄率が高いので、まだ当分は購入しなくなることはないだろうと思われること、③現在利子率が極めて低く、経済成長率より低くなっているため、返済につまることはないだろうという予想がされていること、の三点が示された。ただ、プライマリーバランスの赤字が続けば、これはどうなるか分からない。ここの理解は大事である。と指摘して講義を終えた。



第3講義 「高校教科書で教える金融・証券」担当：東証榊原宏司氏

今年から講師陣に加わった榊原氏のはじめての講義である。

講義は、株式会社のエピソード、兜町周辺の話からはじまった。お江戸日本橋の広重の絵や江戸時代の日本橋周辺、さらには兜町の様子など興味深い資料が提示された。

その上で、講義は、株式会社と資金調達の問題をメインとして、①株式会社の特色、②間接金融と直接金融、③証券市場の役割をまず説明した。

次に、現代の企業とM&Aを説明、具体例をかたりながら現状を解説した。

最後に、サブプライム、リーマンショック以降の金融規制問題に言及した。

質疑では、倫理と経済の関係、特にマネーゲームをどう考えるべきか、や、起業に関する日米の違いと現実はどうなっているかなどが提出された。

多くのデータと途中クイズなどを入れながら、現代における金融の役割、特に直接金融の意味を丁寧に紹介した講義であった。

第4講義 グループディスカッション

参加者 10名

少人数のため1グループで行う。自己紹介のあと、実践や悩み、質疑を行った。

受験校では、政経プラス倫理のカリキュラム問題、大学受験と内容理解の掘り下げ方が話題となる。中堅高では、生徒の社会科きらい政経きらいをどう対処するかが話題となる。そのなかで、この種の研修会をぜひもっとやってほしいという要望も出た。また、理論的なバックボーンをきちんと説明してくれることで、理解が進んだという評価も出た。

質問では、初心者の教員が読むとよい本は何か問われた。

株価が上がるとなぜ、企業にとってはよいのかという素朴な疑問が出されたが、これは結構な難問であることが判明。

プライマリーバランスと利子率はどう関係するか、という専門的な疑問も出された。

生徒はお金のことは興味を示すので、それをうまく誘導できるとよいという意見がでた。

少人数であったが、かなり掘り下げた質疑が行われた充実したディスカッションとなった。

文責：新井 明